

大学学習法におけるコンピテンシーの研究 —「人文総合演習」を考える—

人文学部
松井 克浩

A Research on Competencies for Study Skills: To Improve Freshman Seminar Programs

MATSUI Katsuhiko

The aim of this report is to indicate an attempt to improve Freshman Seminar Programs. The Freshman Seminar will help students build essential college-level skills and competencies associated with study in the arts and humanities: not only in reading and writing, but also in peer collaboration and group work. For this purpose, we had faculty development sessions and discussed about how to develop teaching skills and effective syllabus.

Keywords: Freshman Seminar, Study Skills, Competencies, Collaboration, Effective Syllabus

はじめに

本報告では、2009年度新潟大学授業改善プロジェクトに採択された人文学部のプロジェクト「大学学習法におけるコンピテンシーの研究」による成果の概要を紹介する。

人文学部では、2010年度からスタートする主専攻プログラムの導入に合わせて、初年次教育の改善を企画しており、その議論を学部内で進めてきた。2010年度より従来の行動科学・地域文化・情報文化の3課程を廃止して人文学科1学科に統合するとともに、9つあった履修コースを6つの主専攻プログラムに再編した。学生は、人文学科に入学し、2年次から心理・人間学、社会・地域文化学、歴史文化学、日本・アジア言語文化学、西洋言語文化学、メディア・表現文化学の6つの主専攻プログラムのいずれかを選択することになっている。したがって初年次教育の重要性は、これまでも増して高まっている。

入門科目とともに人文学部の初年次教育の中核をなす大学学習法「人文総合演習」は、これまで「日本語表現能力」と「課題探求能力」の涵養を目指す、人文学部の4年間の演習科目の出発点に位置づけられてきた。しかし、「学士力」全体を視野に入れる時、スタディスキルズはもとよりジェネリック・スキルの涵養の場としても、この「人文総合演習」の果たすべき役割は大きい。また「知識・理解」を深める専門教育とバランスをとる形で、「グループワーク」「相手の意見に耳を傾ける」など「態度・姿勢」の育成に関わる教育も

重要であるといえよう。

本プロジェクトにより、「人文総合演習」のシラバスの改善や「課題探求能力」「協同力」「傾聴力」を育成する実践的な教授方法を研究するために、FD・SDを開催してきた。そのなかで、「大学学習法」のあり方を再検討して教員の新たなコンピテンシーの形成を目指すとともに、2009年度から採択された文部科学省GP「社会をひらく「きづく力」と「つなぐ力」」により展開される授業科目との接続を視野に入れた議論も進めている。

以下では、教員の新たなコンピテンシーの形成を目指して本プロジェクトにより開催した人文学部FD・SDのうち、「人文総合演習を考える」「人文総合演習を考える part II」と題した2回分の概要を報告する。

1. 人文学部FD・SD「人文総合演習」を考える

2009年5月20日に、本プロジェクトに関わる1回目のFD・SDを開催した。「人文総合演習」について、人文学部の3人の教員から報告があり、それをめぐって活発な意見交換がなされた。

1-1 「人文総合演習」を考える

まず、人文学部の高木裕教授（副学部長・教育担当）から「人文総合演習を考える」と題して、初年次教育の改善に向けた総論的な報告があった。

高木報告では、教養教育と専門教育の連携の上で「学士力」と「社会人基礎力」の涵養を図るという方向性

が提示された上で、「学士力」は、教養教育、専門教育を問わず、学士課程教育全体の中で培われるべきものであること、人文学部では、これまでも「学士力」の涵養に努めてきたが、今回のカリキュラムにおいては、とりわけ「主体的取組能力」「チームワーク力」などの能力の向上を目指すという目標が示された。

そのための具体的な方策としては、一方では、キャリア意識形成科目の充実の方策として、プロジェクト型の少人数の演習（表現プロジェクト演習）を新たに導入して、協同力・創造力・表現力の涵養を目指すこと、他方では、人文総合演習における「日本語表現能力」の涵養に加え「協同力」の涵養を目指すという方針が述べられた。

2010年度からの新しいカリキュラムでは、従来からの4年一貫の演習体系に、表現プロジェクト演習を加えるとともに、協同力やチームワーク力の涵養を視野に入れて人文総合演習A（1学期）・人文総合演習B（2学期）の差異化を図るという方針もあわせて示された。

1-2 「人文総合演習」の授業実践から

ついで、人文学部の三谷武司助教から、担当中の「人文総合演習」の実践例について報告があった。三谷氏の授業の特徴は、（たとえ新書・文庫とはいえ）1回1冊を読んでいくという分量の多さと、報告者・司会者の役割、事前準備の仕方などを学生に明確に伝えておく点、準備の過程で報告者・司会者と教員が演習の進行について長時間打合せをする点などにある。さらに、教員による寸評や演習参加者のレスポンスカードの内容をウェブに掲載することにより、演習の成果や反省を事後に各人が共有できることも大きな特徴である。教員の適切なサポートがあれば、たとえ1年生であっても、高い要求に高い水準で応える力を学生がもっていることをこの授業実践は示している。

以下に配付資料の抜粋を掲げておく。

◇演習の進め方

- (1) 毎回、1人がレジュメを作成して口頭報告、1人が司会、全員で議論。
- (2) 検討対象は、毎回新書 or 文庫1冊。ただしレジュメ作成は1冊全部を前提として、一部でよい（たとえば1章分とか。そのつど決める）。
- (3) 議論は基本的にフリートーク。教員も同じ立場で参加する。司会の役目は、議論の流れをコントロールし、沈黙を作らないこと（自分が喋るなどして）。
- (4) 毎回、終了後に、レスポンスカードを提出（演習中にできなかった質問・感想など、報告者・司会への評価、進め方への注文、その他なんでも）。

1-3 課題探求型学習の実践例について

最後に、人文学部の番場俊准教授より「シンポジウム実習」の試みについて紹介があった。主として2年

次学生を対象とした「情報文化実習E」という授業で、話す・聴くという営みに主眼を置いて、グループによる「協働知」の獲得を目指すものである。具体的には、いくつかのグループに分かれてシンポジウムの企画を練り、話し合いを重ねて、最終的には実際に「シンポジウム」を開催する。学生にとっては、準備や打合せなど授業時間以外の学修も多くなり、本番の「シンポジウム」運営へのプレッシャーもかかる。だが、それだけに得るところも大きいと思われる。課程ごとに設定された2年次の実習科目と学部全体の初年次教育との違いはあるが、番場報告からは、「人文総合演習」で協同力やチームワーク力の涵養を図る際の示唆を得ることができた。

以下に、授業シラバスの抜粋を掲げる。

〈概要〉問題を設定し、自分の考えを論理的に伝え、共同で討議する——大学で、そして社会で、いまももっとも必要とされていながら、なかなか習得が容易ではない「話す」技術＝教養の訓練をする。具体的には、各自が追求した問題関心をもとに数名のグループをつくって共同研究を進め、学期末に学生によるミニ・シンポジウムを開催してもらおう。いわば本番の緊張感のなかで、「人前で話す」ことの喜びと困難を実感したい。〈達成目標〉自分の考えをはっきりと話し、他人の話聞き、共同で議論していくなかでお互いの考えを発展させるという、もっとも基本的な姿勢の体得。〈授業計画〉ビデオ等によるシンポジウムの実際の勉強からはじめ、テーマ設定、グループ分け、共同でのシンポジウム準備と進む。途中で、簡単なプレゼンテーション・ソフトの練習もする予定。

2. 人文学部FD・SD「人文総合演習」を考える part II

2010年2月22日に、弘前大学21世紀教育センター高等教育研究開発室の土持ゲーリー法一教授をお招きして、本プロジェクトに関わる2回目のFD・SDを開催した。前半は「「人文総合演習」を考える part II」と題して土本氏からの報告とコメント・質疑応答を行い、後半は「平成21年度の人文学部GP事業」として、GPにかかわる各授業担当者からの授業報告と土持氏からのコメント、質疑応答を行った。

土持氏は高等教育史の専門家で、ラーニング・ポートフォリオやティーチング・ポートフォリオを取り入れた優れた授業実践が高い評価を受けている。今回のFD・SDでは、「ラーニング・ポートフォリオを活用した初年次教育への取り組み～能動的学習実践の事例」と題してご報告いただいた。報告は多岐にわたったが、ここでは要点のみいくつか紹介する。

土持氏によれば、ラーニング・ポートフォリオとは、学生の学習について知ることのできる強力なドキュメ

ントで、次の3つの要素から構成される。①「リフレクション」、すなわち、省察である。②「ドキュメンテーション」で、学生の学習過程について知ることができる資料、すなわち証拠資料である。③「コラボレーション（共同作業）」で、学生が単独で学習するのではなく、互いに協力し合いながら学習するもので、メンターリングの働きをする。これらの3つがラーニング・ポートフォリオの中心となるが、中でも最も重要なものが、リフレクションである。学生が自らの学習過程を「省察」し、何を、なぜ、どうしてと問いかけながら、学習過程を振り返ることを促すものである。

また土本氏は、学生の能動的学習を引き出すためには、授業シラバスの見直しが必要であるとして、次の点を指摘した。①課題中心の能動的学習を促進するための授業シラバス設計が必要である。②授業全体の到達目標とは別に、授業ごとの到達目標の設定することである。③授業ごとの到達目標を設定することで、課題学習が導入しやすくなる。④ラーニング・ポートフォリオを活用した授業デザインの設計を試みることである。

さらに学生の自学自習を促すために、図書館にある図書を指定し、それを読んで問いに答えるという課題を出している。土持氏によれば、この「指定図書」のねらいとは、①「指定図書」を導入する目的は、学生に「自学自習」を徹底させ、単位の実質化を促すためである。②自学自習を促すために図書課題を与え、自主的な学習態度を育むことを目的に、これを「指定図書（Reading Assignment）」と名づける。③指定図書は、学生がいつでも利用できるように、図書館での閲覧のみとし、他の学生の利用の便を考えて、貸し出し禁止している。④これは、初年次教育において効果的である。

いずれも受け身の学習から能動的学習への「学びの転換」を促すための工夫であり、「主体的取組能力」や「チームワーク力」などの能力の向上を目指す人文学部の取り組みにとっても、大いに刺激を受けた。報告を受けて行われたコメントと質疑応答においても、学習者の視点に立つことの重要性や「省察」の意義が話題となった。また、学生の能力を引き出すためには、集団で取り組ませる（コラボレーション＝共同作業）が有効であることも確認された。

3. 成果と課題

以上のようなFD・SDの開催にもとづいた「大学学習法におけるコンピテンシーの研究」は、いくつかの成果をあげるとともに、その中で今後取り組むべき課題も浮き彫りになった。最後に、これらの点について簡単に記しておく。

3-1 成果

FD・SDの報告・討論を受けて、このプロジェクトの当初の目的であった「人文総合演習」のシラバスを改善し、共通化することができた。「科目のねらい」については、下記のように人文総合演習A・B共通に設定し、「学習の到達目標」は人文総合演習AとBで差異化を図っている。人文総合演習Aでは、話すこと・書くことに比重を置き、人文総合演習Bでは、聴くこと・協同することに比重を置いている。

【科目のねらい】（人文総合演習A・B共通）

日本語能力（読む、書く、聴く、話す）の涵養
レポート・プレゼンテーション能力の涵養
文献・資料の収集、整理、活用
課題に取り組む主体性の涵養

【学習の到達目標】（人文総合演習A）

自分の意見をわかりやすく伝え、かつ文章表現できる

自ら文献・資料を収集できる
課題に主体的に取り組む

【学習の到達目標】（人文総合演習B）

コミュニケーションの中で、相手の意見を丁寧に聴き、理解することができる

収集した文献・資料を活用できる
協同して、課題を探求できる

また、FD・SDを通じて教員間で問題意識や解決方法の共有がある程度なされたと思う。まず、学生の能動性を引き出す方法については、ウェブの活用やシラバスの改善、指定図書の導入などがヒントになった。ついで、「課題」にもとづいたグループワークの方法については、シンポジウム実習やコラボレーション（共同作業）の試みが刺激を与えた。さらに、グループワークにおける学生の評価法に関しては、ラーニング・ポートフォリオの意義を多くの参加者が感じた。むろん多くの制約条件がある中で、こうした優れた事例をすぐに取り入れることは困難だが、長期的に改善を試みていく際には多くの示唆が与えられたといえる。

3-2 課題

今回のプロジェクトを通じて、これから取り組むべき課題もいくつか明らかになった。まず、人文総合演習A・Bについて、科目のねらいや学習の到達目標の共通化が図られたが、それを個々の授業担当教員の個性やこれまでの蓄積とかみ合わせて優れた内容を作っていくためには何が必要かということである。この点は、もちろんそれぞれの教員の創意工夫によるところが大きい。他方で、それを学部のFD・SD等の機会に持ち寄り、経験を蓄積していく持続的な取り組みが必要とされるだろう。

さらに、4年一貫の演習体系の有機的な接合も今後

の課題である。初年次の人文総合演習 A・Bでの学習を、基礎演習（2年次）および表現プロジェクト演習（2年次以上）にどのようにつないでいくか。それは、

今回の授業改善プロジェクトと昨年度から指定を受けている文科省 GP「社会をひらく「きづく力」と「つなぐ力」との接合を実質化していく課題でもある。